

第64回日本音楽学会全国大会 プログラム

大会第一日 11月2日(土)

9:00~	受付(512教室)
9:30-9:35	開会の辞(527教室)

	515教室	516教室	522教室	524教室	
	Session A 司会: 千葉優子	Session B 司会: 千葉潤	Session C 司会: 那須輝彦	Session D 司会: 福中冬子	
9:40-10:20	A-1 塚原康子 日露戦争時の海軍軍楽隊—海軍軍楽長・吉本光蔵の明治37・38年日記から	B-1 森本頼子 シェレメーチェフ家の農奴劇場(1775-97)におけるトラジェディ・リリック上演の試み —領主ニコライとパリ・オペラ座の音楽家イヴァールの往復書簡を手がかりに	C-1 宮崎晴代 中世のソルミゼーション理論といわゆる「ガイドの手」	D-1 奥村京子 G・リゲティ往復書簡集の調査より: システムの設定と崩壊	
10:25-11:05	A-2 三島わかな 戦前のラジオ放送にみる沖縄イメージ—1938-40年の番組を対象に—	B-2 岡田彩 パリ・オペラ座バレエ作品(1908-38)の復元可能性 —アドルフ・ビリュ《アルモールの糸紡ぎ車 Le Rouet d'Armor》(1936)を例に	C-2 大島俊樹 ヨハネス・デ・ムリス『計量音楽の小冊子』の初期伝承過程	D-2 沈孝静 モートン・フェルドマンの後期作品とウェーベルン	528教室 ラウンドテーブル1 10:25-12:25 17~18世紀ヨーロッパの転換期における宗教と劇音楽—ドイツ、フランス、イタリアの比較から見えて来るもの
11:10-11:50	A-3 武田康孝 戦中~戦後期の音楽放送における番組制作者の対「大衆」観 —丸山鐵雄の言説を中心に	B-3 一柳富美子 プーシキン『小さな悲劇』4部作のオペラ化に見るロシア音楽の脱西欧	C-3 牧野環 Thomas Tallisの典礼用合唱作品における定旋律のパラフレーズ —発表継続中のセララム聖歌集をもとに—	D-3 東川愛 ビエール・ブーレーズのミュージック・コンクレート —2つのエチュード(1951-52)の草稿と自筆譜の考察	パネリスト: 川田早苗(東日本支部)、山田高志(西日本支部)、司会: 佐藤望(東日本支部)
11:55-12:35	A-4 福田千絵 十五年戦争期の邦楽演奏会: 慰問・献金演奏会を通じて	B-4 神竹喜重子 19世紀から20世紀初期にかけてのロシアにおけるセルゲイ・ラフマニノフ受容 —音楽批評を中心に—	C-4 三城桜子 トマス・モーリーと『音楽への小道 The Pathway to Musicke』(1596)再考	D-4 水野みか子 1940年代のビエール・シェフェールの演劇活動とラジオフォニック	

12:35-13:30 昼休み

	Session E 司会: 尾高暁子	Session F 司会: 福田弥	Session G 司会: 平野昭	Session H 司会: 柿沼敏江	
13:30-14:10	E-1 明木茂夫 南宋張炎『詞源』巻上「律呂四犯」の転調理論 —「羽犯角」がなぜ「閏」調となるのか	F-1 中西充弥 サン=サーンスと日本 ~オペラ・コミック《黄色い皇女》を中心に~	G-1 江端伸昭 J. S. Bachはいつ4声コーラル集をみずから編集したか	H-1 白井史人 「新音楽」と社会——グロノスタイ《あと10分間で》(1928)とアイスラー『4億人』(1939)を事例として	528教室 ラウンドテーブル2 13:30-15:30 ヴェルディとワーグナー——定型からの逸脱——
14:15-14:55	E-2 鳥谷部輝彦 永田聴泉による大正十年春改訂の七絃琴曲「漁樵問答」	F-2 松尾梨沙 詩学的構造から読み取るショパンのバラード —ミツケヴィチ『バラードとロマンス』を例に	G-2 初山陽子 ヘンデル《メサイア》の歌詞付け——ヘンデルの正当性——	H-2 和田ちはる P. デッサウの《プンティラ》の完結性と非完結性——演劇からオペラへ——	パネリスト: 伊藤綾(東日本支部)、稲田隆之(西日本支部)、岡田安樹浩(東日本支部)、長屋晃一(東日本支部)、司会: 三宅幸夫(東日本支部)
15:00-15:40	E-3 三枝まり・藤田由之 近衛秀麿のオーケストラ演奏における「近衛版」の問題について —昭和前期の管弦楽作品の受容の一側面として	F-3 上田泰史 保守と革新の狭間で —フランス七月王政前期のパリ国立音楽院におけるピアノ教育(1830~1840)—	G-3 丸山瑠子 L. v. ベートーヴェン 弦楽四重奏曲Op. 18とOp. 59の比較分析 —使用音域の拡大と楽曲構成との関連——	H-3 松岡由起 バーンスタイン《キャンディード》におけるドラマトウルギー	527教室 講演 15:30-16:25 原典版とは何か?
15:45-16:25	E-4 山本美紀 ホール・芸術文化団体と学校とによる「連携型教育プログラム」開発をめぐる —ドラマが導く音楽芸術体験の深化—	F-4 福島睦美 スペイン製ピアノの興隆: パルセロナのピアノメーカーを中心に	G-4 大崎滋生 ベートーヴェンと楽譜出版[3] 1820年代の楽譜出版者とのやりとり、および全体の総括	H-4 池原舞 ストラヴィンスキーの晩年の作曲法——ブロック化による楽曲構造生成プロセス	ダグラス・ウッドフル=ハリス(バーリンライター出版社専属楽譜校訂者)通訳: 木村小百合

16:40-18:10	総会(南校舎5階 ホール)
18:30-20:30	懇親会(南校舎4階 ザ・カフェテリア)

大会第二日 11月3日(日)

	515教室 Session I 司会: 太田峰夫	516教室 Session J 司会: 石井明	522教室 Session K 司会: 長木誠司	524教室 Session L 司会: 友利修	
9:40-10:20	I-1 飯野りさ アラブ歌謡にみる音楽的な語り: 歌詞表現を補完する旋法の記号的特性を中心に	J-1 園田順子 劇的詩篇曲への転換-J.ローゼンミュラーのヴェネツィア期の作品を例に—	K-1 津上英輔 古代悲劇の正統継承者としてのオペラ: アリストテレスからメイまで	L-1 稲田隆之 《トリスタン》における「詩のメロディー」—トリスタン和音と半音階法との関係から—	528教室 ラウンドテーブル3 10:25-12:25 「18世紀音楽」新考～地域を越えた音楽史学の可能性
10:25-11:05	I-2 畑智子 フィンランドの神話物語と伴奏楽器カンテレ —今日の民俗音楽祭でのパフォーマンスを中心に—	J-2 新林一雄 18世紀前半のドレスデン宮廷楽団と協奏曲 —ファゴットと低音弦楽器の選択を中心に—	K-2 萩原里香 エンツォ・ベンティヴオットリオを通して検証するコロラゴの仕事	L-2 岡田安樹浩 ワーグナーの《ニーベルングの指環》における管弦楽化プロセス	パネリスト: 森泰彦(東日本支部)、安田和信(東日本支部)、野川美穂子(東日本支部)、前島美保(東日本支部)、司会者: 平野昭(東日本支部)
11:10-11:50	I-3 三代真理子 クレズマー音楽の演奏目的と音楽構造 —《カレ・バゼツン》と《フン・デル・フベ》を事例として—	J-3 黒川照美 「古楽」と「モダン」——戦略の本質主義によって構築された二元的カテゴリー	K-3 森佳子 オペラ《ボルティチのおし娘》をめぐる—オペラと映画、異なるメディアの出会い—	L-3 上山典子 リストによるヴァーグナーのドラマ編曲美学	
11:55-12:35	I-4 家田恭 19世紀のプラハ音楽社会における軍隊のポピュラリティ	J-4 光平有希 R. ブラウンの音楽療法思想に関する—考察—『医療音楽』(1729)を中心として—	K-4 新田孝行 データベース化するオペラ——演出家シュテファン・ヘアハイムについて	L-4 佐野旭司 マーラーとシェーンベルクの相互関係——《浄夜》を中心として	
12:35-13:30	昼休み				
	Session M 司会: 沼野雄司	Session N 司会: 西川尚生	Session O 司会: 中村仁	Session P 司会: 土田英三郎	528教室 ラウンドテーブル4
13:30-14:10	M-1 中村 真 民謡におけるドラマの記述 —レオシュ・ヤナーチェクのモラヴィア民謡研究における楽式分類法—	N-1 松田 聡 「ヴィテツリアのロンド」におけるドラマと祝祭性 —モーツァルトの《皇帝ティートの慈悲》にかんする—考察—	O-1 城西瑠香 「ペレアスとメリザンド」に見るドビュッシーの近代的観念	P-1 米良ゆき ヨハン・マッテゾン『完全なる楽長』の旋律論に関する—考察— —修辞学をめぐるマッテゾンの揺らぎの意味について	13:30-15:30 日本・アジアの音楽劇における「近代化」
14:15-14:55	M-2 奥坊由起子 1920年代の <i>The Musical Times</i> におけるエルガー —フォークソングの議論をめぐる—	N-2 大津聡 「モラル劇場」のモーツァルト—ドイツ語圏のモーツァルト評伝におけるオペラ	O-2 永井玉藻 フランシス・ブーランクの《カルメル会修道女の対話》における作曲プロセス	P-2 大高誠二 マティス・リュシーの旋律構造理論——その意義と限界	パネリスト: 尾高暁子(東日本支部)、風間純子(中部支部)、土田牧子(東日本支部)、三浦裕子(非会員)、司会: 千葉優子(東日本支部)
15:00-15:40	M-3 川崎瑞穂 田野十二神楽の天狗舞とその音楽的特徴	N-3 福地勝美 セシリア主義者が聴いた、モーツァルトのオペラによる教会音楽 —《コシ・ファン・トゥッテ・ミサ曲》ほかの受容をめぐる—	O-3 野口方子 オペラ《影のない女》に対する、ドラマからの照射 —— 音楽と言葉との邂逅 ——	P-3 大迫知佳子 19世紀前半における和声理論と自然科学の関わり —ジェローム＝ジョゼフ・ド・モミニとフランソワ＝ジョゼフ・フェティスの理論を中心に	
15:45-16:25	M-4 中村滋延 小津安二郎の戦前のトーキー映画における音楽の構造的機能	N-4 山口真季子 ウィーンのシューベルト没後100年祭(1928) —シューベルトのドイツ性とオーストリア性をめぐって—	O-4 藤村晶子 1930年初頭のヒンデミット——ゴットフリート・ベンとの共作から見えるもの	P-4 船木理悠 『音楽的時間』における「音楽的リズム」についての考察	528教室 ラウンドテーブル5 15:40-17:40 日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会による調査報告をめぐって パネリスト: 林淑姫(明治学院大学)、長谷川由美子(国立音楽大学)、上野大輔(東海大学)、司会者: 久保田慶一(国立音楽)
17:40-17:45	閉会の辞(527教室)				